Sh・ナツァグドルジ著
鯉渕信一訳

賢妃マンドハイ

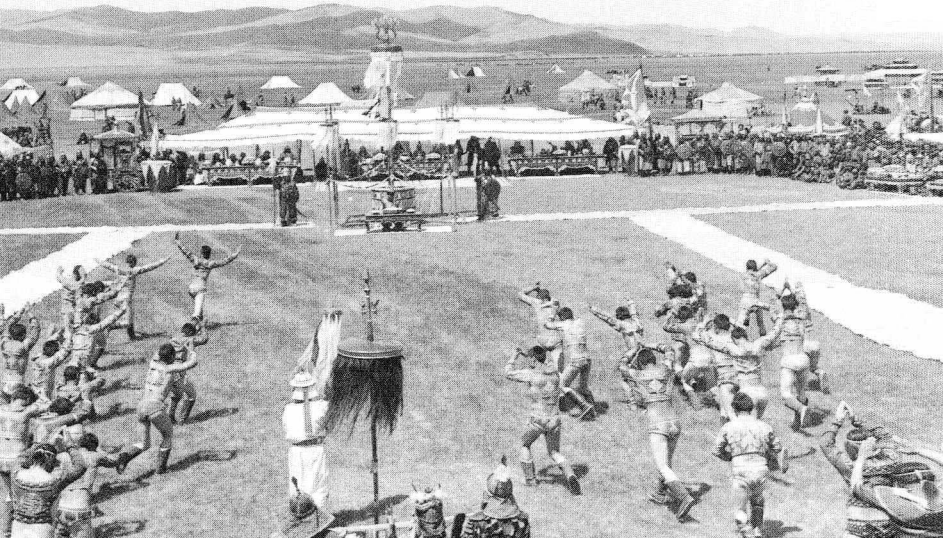
MANDUHAI

Sh・ナツァグドルジ著
鯉渕信一訳

賢妃マンドハイ

MANDUHAI

読売新聞社



一九八九年(平成元年)十一月六日　第一刷

賢妃　マンドハイ

著　者　Sh・ナッァグドルジ

訳　者　鯉渕信一

編集人　篠原義近

発行人　杉林　昇

発行所　読売新聞社

〒100—55　東京都千代田区大手町一の七の一

〒530　大阪市北区野崎町八の一〇

〒802　北九州市小倉北区明和町一の一一

〒460　名古屋市中区栄一の一七の六

印刷所　中央精版印刷株式会社

製本所　中央精版印刷株式会社

定価一五〇〇円

☆乱丁・落丁の場合は，お取り換えいたします

©1989, KOIBUCHI Sinichi ISBN4-643-89078-9 C0097

シューステイとツェグツは東西を代表する勇士であり、気のおけない友だち同士だ

親子ほどの年の離れたマンドールの妃となったマンドハイは、宮廷生活に息がつまりそうだった

大祭の日のバヤンムンフ副王とユンゲン后の行動は、マンドールの疑惑をふくらませた

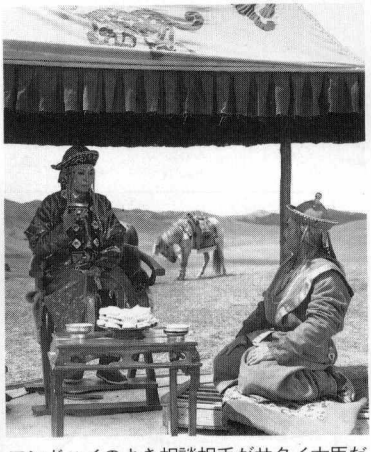
マンドハイは幼少のバトムンフ(左)を大汗に即位させ、自ら皇后となった

マンドハイは自ら戦いの指揮をとり、モンゴルを統一していく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

モンゴルの大軍団が集結した

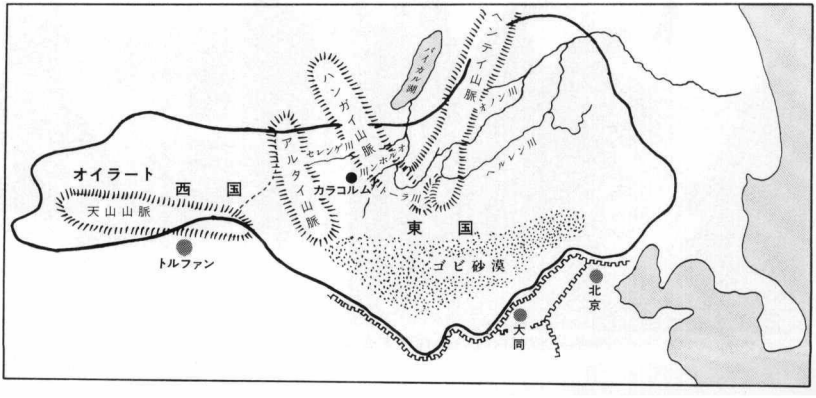
戦場でのマンドハイの陣痛に将軍らはやきもきする



マンドハイのよき相談相手がサタイ大臣だ

オルスボルトが西国へ向かう。マンドハイにとってつらい別れとなった

マンドハイの死にバトムンフの悲しみは深い



日本の読者の皆さまへ

どの民族も勇敢で英明な英雄や女傑を生んできた。この小説は、モンゴルの歴史に現れたそんな一人の女性についての物語である。

十五世紀になると、モンゴル帝国は分裂し、その威光は衰え、多くの大小王侯貴族が頭をもたげ、モンゴル大汗（ハーン）の座をめぐる争いが激化した。隣国の明国はモンゴル平定をもくろんで王侯同士の争いを助長すると同時に、武力によるモンゴル攻撃を執拗に繰り返していた。

民衆の苦しみが極限に達し、モンゴルの独立に危機が迫った時、マンドール大汗の妃（第二夫人）マンドハイ（一四三七～？）は、マンドールの死後、チンギス大汗直系の病弱の子、バトムンフを空席となった大汗の座につけ、自らはその后となった。マンドハイは王侯たちの勝手な振る舞いを止め、大汗の威光を高めるために自ら鎧に身を包み、手に武器を握って兵を指揮し、幼い大汗をラクダの振り分け荷台に乗せて進軍したのである。

歴史ではバトムンフ・ダヤン大汗が、モンゴル統一をなした英雄として扱われているが、真にこの大事業をなし遂げた人物はマンドハイ后であった。

私は、このモンゴルの秀でた女傑マンドハイ后の栄えある事跡を歴史記録によってひもとき、文学的手法を加えてこのような小説とした。

モンゴル史上、極めて重要な時代を描写したこの小説を、日本の読者に広くお読み頂けることは大変うれしいことである。

もしこの小説に敬愛する日本の読者の皆さまが共鳴され、わが国の歴史の一時代についてわずかでも参考になり、皆さまの関心を少しでも引くことができれば、作者である私および多くの労をいとわずこの小説を翻訳した鯉渕信一氏の二人にとって、この上ない喜びである。

シャグダルジャブィン・ナツァグドルジ

目次

［第一部］

ツォロスバイ家の人々……9
草原の夏……14
出会い……19
求婚……26
宮殿……32
千の頭をもつ蛇……39
大祭……42
暗雲……47
仲違い……54
副王の死……62
シヘル妃の悲劇……70
姫出産……74
万里の長城……78
義賊ミャンハイ……84
マンドール大汗の死……91
謀議……95
バトムンフの消息……107
国璽……113
国の有り様……120
ニスマンの悪知恵……124
戦闘……129
ウヌボルトの死……138
ニスマンの自害……143
ダヤン大汗即位……149

［第二部］

若き大汗……159
巻狩り……164
男と女……170
ビルゲ大汗の石碑……175
歴史……181
雪害……192
老獪……200
アルトジン妃……205
ユンシエブ討伐……208
双子の王子……214
嫉妬……219
別れ……223
いけにえ……226
逆転……234
危機一髪……240
西国の反乱……248
異父兄弟……255
野の花……258
ラマ僧ミャンハイ……264
迷い……272
上申……280
宰相ホタグ……285
ミャンハイ夫婦……295
死……300

装丁・岩黒永興

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

賢妃 マンドハイ

[主な登場人物]
マンドハイ＝ヒロイン。モンゴル再統一を実現した女性
ツォロスバイ侯＝マンドハイの父
ムングルデイ＝マンドハイの母
マンドール大汗＝チンギス大汗の直系のモンゴル王
バヤンムンフ＝副王，マンドールの甥
シヘル妃＝バヤンムンフの妻
バトムンフ＝バヤンムンフの息子，のちのダヤン大汗
サタイ＝モンゴルの大臣，ツォロスバイの片腕だった
ニスマン＝宰相，モンゴルに帰化したウイグル人
ウヌボルト＝マンドハイの恋人
ユンゲン＝マンドール大汗の皇后
ラバグ＝ユンゲンの甥
アルトジン＝ラバグの妹，バトムンフの妃
アルタンシャガイ＝マンドハイの娘
バト＝牧民
ミャンハイ＝西国の義賊
サイハイ＝ミャンハイの妹
トムルジン＝ミャンハイ兄妹の父。バトムンフの養父
ボログチン＝ツォロスバイ家の女中
イシゲン＝ツォロスバイ家の女中
サイモチン＝ユンゲンの侍女
ナチガイ＝神巫
ツェグツ・バートル＝東国の勇士
シューステイ・バートル＝西国の勇士
バヤダイ＝ニスマンの部下，家老
ウリヤンハイダイ＝モンゴルの将軍
バーサン＝モンゴルの将軍
ボルホイ＝ニスマンとシヘル妃の子
オルスボルト，トルボルト＝マンドハイの双子の子
バヤハイ＝ツェグツの息子

第一部 王妃

ツォロスバイ家の人々

子馬のひづめが割れ、子牛のしっぽがちぎれるかと思われるほどに寒く、厳しい冬のさなか。

広大な平原は厚い雪に覆われていた。山ふところに裕福そうな包（バオ）（モンゴル名ゲル＝フェルト製の遊牧民の移動式住居）があった。エングート氏族の貴族ツォロスバイの冬営の幕舎であった。ツォロスバイはおびただしい数の家畜を所有していたが、その家畜は貧しい牧民たちが世話をしていた。牧民たちは、ツォロスバイの家畜と自分のわずかな家畜を連れて、雪の少ないところを探し求めながら放牧する毎日であった。

ツォロスバイの包から東北へしばらく行った地に、みすぼらしい包が点在して見える。ツォロスバイの召使たちの包であった。なかでも特にみすぼらしい包は、フェルトの入り口がボロボロに破れて穴が開き、寒風も防ぐことができない。

老婆バジグが硬くなった敷皮の上に、着古した山羊皮の蒙古服を掛けて横になっていた。かまどには五徳の代わりに三つの石が並べてあり、灰にもぐった牛糞の残り火がわずかに赤みを帯びている。だが、包の中を暖める火力はすでになくなっていた。

老婆バジグと嫁のホンゴルゾルは寒さと飢えに耐えかねている様子であった。ホンゴルゾルの夫バダイはツォロスバイの馬群を追って何日も放牧に出ていた。

入り口の垂れをくぐって、誰かが入って来た。ツォロスバイの一人娘マンドハイであった。年は十六、身を包んだ蒙古服も若く均整のとれた彼女の美しさを隠すことはできなかった。ふさふさした髪と黒テンの帽子が人並みはずれた美貌をいっそう飾っていた。

「おふたりとも、お変わりない？」

と、マンドハイが明るく聞いた。ホンゴルゾルはマンドハイが入ってくると慌てて起き上がったが、二人の間には温かい友情が通っているのが察せられた。

「母が風邪をひいてしまったんです」

心細そうに言った。

「気分はいかが？」

マンドハイは老婆の乱れた髪を撫でながら、優しく聞いた。

「ああ、マンドハイかい！　よく来てくれたね。具合が悪いんだよ、熱っぽくて……」

「もう食べ物がないんでしょう？」

マンドハイがそう言いながら持ってきた包みを開けると、中から太った羊のもも肉やバター、チーズ、珍しい四角の磚茶（たんちゃ）が出てきた。当時、茶はめったに手に入らない貴重な飲み物であった。

「バジグ婆さん、お茶を持って来ましたよ、これを飲んで温まって下さいな。ホンゴルゾル、お母さんにスープを作っておあげなさい」

「なんと慈悲深いお方だ……。去年の夏からお茶というものにはお目にかかっていない、ありがたいことだ、どれ、ひとつ……」

マンドハイは二人を思いやるように見つめ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com